



絆・ベルリン

第1回「翼・プロジェクト」報告
(2013年8月6日～8月7日)

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副会長

岩手県の津波被災地に住んでいる5人の高校生と3人の引率者が 絆・ベルリンの招待でベルリンに来ました。

この滞在の目的はドイツ人若者との交流でした。ドイツ人家庭での6日間ホームステイと高校訪問、2泊3日のワークキャンプがありました。

8月6日（火）

日本人の高校生は成田からコペンハーゲンを経てベルリンに来ました。夕方8時半に、ベルリン・テーゲル空港に到着しました。私たちは彼らを心から歓迎しました。ホームステイ家族は高校生を迎えに来ました。



2人の引率者は私のうちに泊り、1人の引率者はほかの絆・メンバーのうちに泊まりました。

8月7日（水）

まずは市内史跡観光をしました。バスでウンター・デン・リンデン「Unter den Linden（菩提樹の下）」通りに行き、そこから都心を歩き回りました。たとえば、コンサート・ハウスや博物館の島、ベルリン大聖堂、フンボルト大学、ブランデンブルク門を見に行きました。



そして、帝国議会議事堂（Reichstag）の見学をしました。ガイド付きの見学でした。



午後4時に、日本大使館を訪問しました。大使のあいさつがあり、その後で2人の高校生も短いスピーチを行い、自己紹介をしました。高校生は大使に岩手からのTシャツをプレゼントしました。



そして、ボッシュ財団の「ヤングリーダー（日本からの10人の高校生）」と一緒に立食レセプションに招かれ、彼らと交流をしました。

8月8日（木）

日本人の高校生はカニジウス高校でドイツ高校生と一緒に授業に参加した後、日本語コースで東北についてのプレゼンテーションをしました。

午後、日本人の高校生はドイツのホームステイ家族へ戻りました。

夕方に、妻と私は3人の引率者と一緒に、ベルリンのコンツェルトハウスにコンサートを聴きに行きました。



Young Euro Classic（ヤング・ユーロ・クラシック）の枠内で National Youth Orchestra of Wales がクラシックと現代音楽を演奏しました。初演も1曲ありました。有名なハープ奏者の Catrin Finch は自作自演しました。



割れるような拍手を受け、オーケストラは2曲アンコール、ハープ奏者も2曲ソロを演奏しました。ですから、コンサートは3時間ぐらいかかりました。

ちなみに、コンツェルトハウスは1821年にシンケルの設計で建てられました。その建物は1945年にたくさんの爆弾で甚大な損傷を受けましたが、運よく1979～1984年に建て直されました。

8月9日（金）

私たちは「ベルリン・ターフェル（食べ物配布NPO）」を訪問しました。テーブルを意味する「ベルリン・ターフェル」の基本理念は、余った食材を廃棄する代わりにホームレスの人達や貧しい人達に分配できないだろうかという発想に基づいています。スーパーなどにある賞味期限が迫った食料品や前日に売れ残ったパンや市場で売れ残った果物や野菜、さらにはお祭りやバイキング料理で残った食べ物などがその対象であります。こういった食材をボランティアが引き取りに行き、社会福祉施設に届け、そこで調理して分配するという訳です。ホームレス支援機関も、一般の社会援助機関も「ターフェル」から食材の供給を受けています。そして、1ユーロという名目上の価格で袋に入った食料品をいろいろなところ（教会など）に配布しています。

日本人の高校生はベルリン・ターフェルで3時間ほどボランティア活動をしました。



その後で、パワーポイント・プレゼンテーションを見て、食べ物の浪費について論じました。ちなみに、現在ドイツには、400 を越える「ターフェル」があります。

次は、ベルリン日本語補習校を訪問しました。本校は、1973 年、在留邦人によって、当時の西ベルリンに設立されました。

以後、日本国政府も在ベルリン日本企業も日本語補習校を援助しています。在ベルリン日本人の幼児から高校生までを対象に、平日の放課後や週末に日本語での授業が行われています。

日本語補習校は本当に「日独の架け橋」だと思います。高校生クラスの生徒達 15 人と一緒に楽しくディベートをしました。

午後 7 時半に、福澤邸では「ワークキャンプ」の夕食を始めました。5 人の日本人の高校生と 5 人のドイツ人の大学生と 4 人の引率者が参加しました。

8月10日 (土)

ワークキャンプは午前8時半に始まりました。自己紹介の後で、それぞれが準備してきたテーマについて発表した後、質疑応答をしました。



高校生は日本料理と日本のサッカーリーグ、音楽、日本歴史、漫画についてのプレゼンテーションをしました。旅行の前に、彼らはプレゼンテーションの準備して、原稿を書きました。

午後に、若者全員は台所で料理をしました。そして、歓迎パーティーを庭で行いました。パーティーには出席者が40名以上いました。



絆・ベルリンと友の会のメンバーだけでなく、日本大使館の一等書記官とベルリン・独日協会の副会長もきました。バーベキューなどをしました。高校生たちは手巻き寿司を作りました。お米は岩手から持ってきました。

8月11日 (日)

ワークキャンプは昼ご飯まで続けました。今日はドイツ人の大学生がプレゼンテーションをしました。テーマは歴史と哲学などです。最後に岩手県の高校生たちがグループで津波の被災地についてプレゼンテーションをし、討論が行われました。

11時半に、ホストファミリーは高校生を迎えに来ました。午後はホストファミリーと一緒に自由行動をとりました。

8月12日 (月)

今日は2回目の市内史跡観光をしました。まずは、ベルリンの壁記念館(Gedenkstätte Berliner Mauer)を見に行きました。

1961年8月13日に建設が始まったベルリンの壁は、28年も経った1989年11月9日に崩壊しました。そして、その一年後に、東西ドイツは再統一されました。

ドイツ再統一の流れの中で、壁の崩壊は明白な政治的意志だったので、壁は市内のごく一部を除いて、完全に姿を消しました。今では、市内に3ヶ所だけ壁がまだ保存されています。

そのうちのひとつが、ベルナウアー道路 (Bernauer Strasse) にある壁記念館です。



壁記念館の展望台に登って、記念碑とベルリンの壁を辿る屋外展示を観光しました。



ベルリンの壁記念館

その後で、地下鉄でイースト・サイド・ギャラリー（Eastside-Galerie）を見に行きました。シュプレー川沿いに約 1.3km のベルリン壁が残されています。この部分には「ベルリンの壁建設」にインスピレーションを得た 24 の国の芸術家 118 人による壁画が描かれていて、その中には「ホーネッカーとブレジネフの熱いキス」を描いた戯画も含まれています。



私たちはイーストサイドギャラリーの壁画を観光しました。そして、オーバーバウム橋（Oberbaumbrücke）でシュプレー川を渡って、クロイツベルク区を散歩しました。クロイツベルクは多文化地区です。ここに住んでいる人の 20%以上が在留外国人です。若い人たちもたくさんいます。トルコのレストランでいろいろなトルコのピザを食べました。



そこで、障害者のための工場を 1 時半間見学しました。案内者は工場の経営者です。まず、彼は概略を示しました。そして、いろいろな工作室を見に行きました。たとえば、製本所や籠細工、ブラシ製造所を観光しました。製本所では日本の紙を加工しています。



市内史跡観光後、日本人とドイツ人の高校生と一緒にショッピングをしました。

8月13日 (火)

高校生は福沢先生の案内でポツダムに行き、街を見学しました。サン・スーシ宮殿やツェツィリエンホーフ宮殿などを観光しました。ポツダムは「ポツダム会談」や「ポツダム宣言」という世界史の舞台として知られます。ツェツィリエンホーフ宮殿では「ポツダム会談」が開かれました。ツェツィリエンホーフ宮殿では「ポツダム会談」が開かれました。



「ポツダム会談」という首脳会談の席上で、日本の無条件降伏についても話し合われました。

会談期間中、米国の大統領トルーマンはポツダム・グリープニッツゼーにある邸宅に滞在しました。その邸宅では、1945年7月25日にトルーマンがヒロシマ・ナガサキへの爆弾投下を命じました。

2005年に旧トルーマン邸宅前の広場がヒロシマ広場と命名されました。2010年に、そのヒロシマ広場に原爆犠牲者の追悼記念碑が建てられました。帰り道にその記念碑も見に行きました。

昼に、ドイツ・女子サッカー・ブンデスリーガ1部の1.FFC トゥルビネ・ポツダムを訪問しました。



永里亜紗乃

トレーニングキャンプで永里亜紗乃（ながさと あさの）と話すことができました。ポジションはフォワードです。トレーニングを30分ほど見ました。

午前5時に、絆・メンバーのうちでお別れ会をしました。30名が参加しました。友の会や絆・メンバー、ベルリンにある日本のレストランが、いろいろな料理を作ってくれました。



庭でバーベキューもしました。終わりに、絆・メンバーは皆日本人の高校生からプレゼントとして名前入りプリントTシャツをもらいました。



8月14日 (水)

朝早く起きて、テゲル空港に行きました。飛行機は10時ちょうどに出発しました。別れに際し、みんな涙ぐんでいました。その日の夜、私は日本大使館で絆・プロジェクトと翼・プロジェクトについてスピーチをしました。たくさんの写真も映しました。

次の日から2，3日間本当に疲れ気味でした。

フランク・ブローゼ (Dr. Frank Brose)

ベルリン、2013年8月